



「支え合うこと、助け合うこと」をもっと身近に感じて、そして社会に広げ、つなげていくのが「ゆにふあん」。「ゆにふあん」を活用している方々にインタビューしていきます。

第12回

連合岐阜青年委員会の
児童養護施設への支援・交流活動

連合岐阜青年委員会



小鷹啓徳 委員長



常川裕太 副委員長



西山和人 事務局長

“労働組合だからこそ”の支援で 子どもたちに「働く」ことへの夢を

青年委員会が中心となり社会貢献活動を行う連合岐阜には、長年継続している2つの取り組みがある。2012年にスタートしたエコキャップ運動と、2006年から続く児童養護施設「合掌苑」への寄付・交流活動だ。なかでも合掌苑との交流は、工場見学や企業訪問を通して多くの子どもたちに働くことの楽しさや希望を与えてきた。今回は、活動を継続する意義や原動力、その中で受け継がれてきた青年委員の思いについて話を聞いた。

「学び」の要素を取り入れ 交流の幅を拡大

「社会貢献活動への取り組みを始めたきっかけは？」

ペットボトルのキャップを集めてポリオワクチンを寄付するエコキャップ運動は、「世界の子どもにワクチンを 日本委員会」の主要メンバーの方からの呼びかけから始まり、途上国の子どもたちにワクチンを届けることの重要性や支援の仕方などを教わり、青年委員会で受け継いできました。これまで集めたキャップは約263万個、ワクチンに換算すると3千人分以上を寄付してきました。

児童養護施設「合掌苑」への寄付活動のきっかけは、2006年の岐阜の中央メーデーです。青年委員会の活動として参加したプラカ

働く大人に触れることで 子どもたちの世界が広がる

「合掌苑への支援を継続する中で活動の幅も広がりましたね。」

最初は寄付活動の際に子どもたちと一緒に遊ぶぐらいの交流でしたが、次第に「遊ぶだけでなく、いろいろと学んでもらいたい」という気持ちが強くなりました。「将来何になりたいの?」と聞くと、「どんな仕事があるのかわからない」と答える子が多くいたからです。

「支援を継続する原動力と意義とは？」
やはり子どもたちの笑顔が力になっていきますね。笑顔を見るとこちらも嬉しくなります。子どもたちも私たちの顔を覚えてくれていきますし、遠く離れていても結ばれている「絆」みたいなものを感じています。

子どもたちのためになることを試行錯誤でやってきましたが、根底には脈々と受け継いできた、「続けることに意味がある」との思いがあります。私たちとの交流を経験した子どもたちが将来大きくなって、仕事を通じて、労働組合を通じて、同じような境遇の子どもたちをサポートし、またその子たちが大人になって同じようにサポートをしてくれたらいい。「つながり」といいますか、大きな話ですが、世界は平和になっていくのかなと思いますし、そうしたところに活動の意義があるのだと思います。

「ゆにふあんへの期待や要望は？」
ゆにふあんなは、連合岐阜の活動を全国の方に知っていただく場としてもありがたい存在です。また、他の組織の取り組みが一目でわかる仕組みが素晴らしいと思います。私たち青年委員会も活動の参考にしていきますし、ゆにふあんに可能性がまだまだたくさんあると期待しています。日本全国の青年委員会が集まる場があれば、きっと新しい活動の起爆剤になると思いますので、まずはゆにふあんに通じて交流の機会を設けていただきたいと思います。

「働く大人を見てみよう」
プロジェクト



ボトルキャップ回収工場を見学



郵便局の仕事を学ぶ子どもたち



集めたキャップを寄贈

「コロナ禍での活動は？」

ここ2年は新型コロナウイルス感染症の影響により、対面での交流ができなくなっていました。しかし、子ども用の洗える布マスクを寄付したり、昨年、「私のお仕事ファイル」という冊子を作成して

贈りました。

「私のお仕事ファイル」は、青年委員会の幹事が自分の携わっている仕事を解説しています。車の金型の会社なら、車が完成するまでの工程を「こういう部品をつくって、こうやって一台の車ができてんだよ」と、写真やイラストを使って子どもにもわかりやすいよう工夫しています。また、冊子冒頭で労働組合の役割や連合岐阜の活動を紹介していますので、労働組合の大切さについても理解を深めてもらえるのではないかと思います。

「今後の課題、問題意識は？」
合掌苑との交流は年に1回ですが、回数を増やして、子どもたちが様々な社会を知ることができる機会をもっと提供したいです。

また、施設を退所した後の自立を支援するような取り組みもできたらと思っています。児童養護施設は原則18歳で退所しなければならず、進学や就職をしても頼れる人がいない状態で、一人で生活していくには未熟さもあります。以前、そうした若者たちが、うまく社会に馴染めず孤立状態にあるというニュースを見ました。もし、合掌苑でも同様に社会人として軌道に乗れない子がいるのであれば

「子どもたちのためになることを試行錯誤でやってきましたが、根底には脈々と受け継いできた、「続けることに意味がある」との思いがあります。私たちとの交流を経験した子どもたちが将来大きくなって、仕事を通じて、労働組合を通じて、同じような境遇の子どもたちをサポートし、またその子たちが大人になって同じようにサポートをしてくれたらいい。「つながり」といいますか、大きな話ですが、世界は平和になっていくのかなと思いますし、そうしたところに活動の意義があるのだと思います。

「ゆにふあんなは、連合岐阜の活動を全国の方に知っていただく場としてもありがたい存在です。また、他の組織の取り組みが一目でわかる仕組みが素晴らしいと思います。私たち青年委員会も活動の参考にしていきますし、ゆにふあんに可能性がまだまだたくさんあると期待しています。日本全国の青年委員会が集まる場があれば、きっと新しい活動の起爆剤になると思いますので、まずはゆにふあんに通じて交流の機会を設けていただきたいと思います。」

「ありがとうございます。」

